

# 物語生成における「見える要素」から「見えない要素」への転換を促すメカニズム

—歌舞伎演目「桜姫東文章」の驚きの展開はなぜ受け入れられるのか—

青木慎一郎<sup>†</sup>

Shin-ichiro Aoki

<sup>†</sup>岩手県立大学

Iwate Prefectural University

midorigi@iwate-pu.ac.jp

## 概要

歌舞伎演目「桜姫東文章」の驚きの展開がなぜ受け入れられるのか。そこには、「個人的な愛情よりも家の存続」を重視するという日本人に特有の心理社会的背景が考えられる。また、かつての高齢者自殺の心理社会的背景にも共通点が見られる。これらの心理社会的背景の個人への影響は、物語生成における「見える要素」から「見えない要素」への転換を促すメカニズムによると考えられる。これは、コミュニケーション全般について想定できる。

キーワード：物語生成、見える要素、見えない要素、転換の促し、抽象、捨象

## 1. はじめに

筆者は、自閉症スペクトラム障害の認知行動傾向のある方のコミュニケーションの特徴を理解することをテーマとしている。その際、コミュニケーション全般において、「物語の受け手にとっての、物語生成における『見える要素』から『見えない要素』への転換の促し」<sup>[1]</sup>が重要と考えている。本発表では、芸能の文脈での感性と物語論という観点から、歌舞伎演目「桜姫東文章」を取り上げ、「個人的な愛情よりも家の存続」を重視する心理社会的背景と、物語生成における「見える要素」から「見えない要素」への転換を促すメカニズムを取り上げる。つまり、ここでは「受け手」の立場としての物語生成、あるいは物語の受け入れとしてのコミュニケーションを取り上げる。

## 2. 「桜姫東文章」の驚きの大団円

初めに、「桜姫東文章」の概略を述べる。前段に清玄と白菊丸の因縁話があるがそれは省略する。

主人公は、吉田家の息女である桜姫。父と弟梅若が何者か（実は後述の釣鐘権助）に殺され、お家の重宝「都鳥の一巻」を奪われ、さらに桜姫自身も権助によって犯されるという事件に会う。このためお家は危機

となった。

終わりに近づいて、五幕目第二場、権助住居の場になる。暗くうらぶれた場面。桜姫は偶然の出会いから権助と二人の間の子との生活をしている。桜姫を女郎に売った金のおかげで今では権助は余裕の生活。この場面で、権助は、自分が元は信夫の惣太という侍で桜姫の父や弟を殺し、都鳥の一巻を奪ったことを口走ってしまう。今や夫権助こそ親兄弟の仇と知った桜姫は、仇権助と血がつながる我が子と権助の二人を刺し殺す。欧米のドラマであればここで悲劇として終わるはずである。

しかし、次に大詰め浅草雷門の場となる。

「都鳥の一巻」を持った桜姫が姿を現す。これで吉田家の再興がかなうと知った桜姫は、夫とわが子を殺してしまったことから自害しようとする。そこへ松若や稲野谷半兵衛がやってきて、権助の悪事が露見した上は自害に及ばないと止める。あだ討ちをはたし、これでお家の再興もかなうと一同は喜びあう。

折から、その日は浅草神社の祭礼。吉田家の重宝「都鳥の一巻」を取りもどした桜姫は、お家再興の願いがかない、元の姫君にもどって大団円。（公式ホームページ [Kabuki on the web](#) より要約し引用）暗くうらぶれた「権助住居の場」から明るい祭りの「浅草雷門の場」への「場面転換」が印象的である。

## 3. 驚きの大団円はなぜ受け入れられるのか

いわばヒモである情夫の権助との落ちぶれた生活。ふとしたことから権助が、父と弟を殺し、お家の重宝「都鳥の一巻」を奪った犯人と露見する。桜姫は権助と実子まで殺してしまう。欧米のドラマであればここまでで、悲劇として終わるはずである。しかし、吉田家の重宝「都鳥の一巻」を取りもどした桜姫は、お家

再興の願いがかない、元の姫君にもどるといふハッピーエンド。

欧米ではあまり見られないようなハッピーエンドはなぜ受け入れられるのだろうか。

それには二つの観点から見る必要がある。それは第一に、物語の受容過程における「見える要素」から「見えない要素」への転換における多重性、つまり心理社会的背景の影響である。<sup>[2]</sup> (図1)そして、第二にその転換における「見える要素」による「見えない要素」への転換の促し方のメカニズムである。これが「見えない要素」どうしの切り替え、あるいはどの「見えない要素」を選ぶのかの選択を行っている。このようにして、「転換の促し」が「心理社会的背景」の影響を受け実行されるメカニズムとなっていると考える。(図2)

まず、「見える要素」から「見えない要素」への転換における多重性、つまり上述の驚きの大団円が受け入れられる背景には、欧米の文化にはない、「個人的な愛情よりも家の存続」の方を重視するという物語の受容過程に影響する日本人に特有の心理社会的背景が考えられる。(図1)

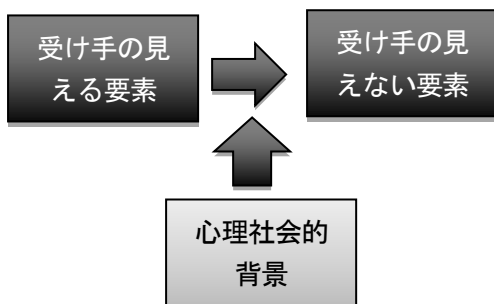


図1 転換における多重性

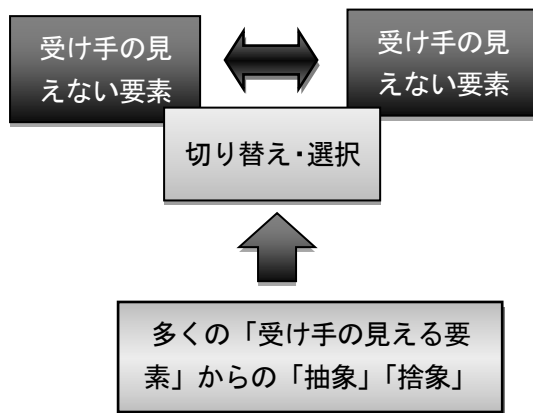


図2 転換の促し方のメカニズム

そして、第二に挙げた、「見える要素」による「見え

ない要素」への転換の促し方（メカニズム）とは、例えば、暗くうらぶれた「権助住居の場」から明るい祭りの「浅草雷門の場」への「場面転換」があげられる。この種の転換の促しが、場面における「見える要素」から受け手にも当然あったであろう夫やわが子に対する「個人的な愛情」を「捨象」してしまう効果があったと思われる。

一方で、同じく「見える要素」である「都鳥の一卷」や「明るい祭り」「女郎から姫君」などから、「見えない要素」である「家の存続」へと「抽象」化をする効果もあったと思われる。ここでいう「抽象」とは「捨象」に対比するものとして使っており、多くの具体的な事柄から共通の属性を抜き出し一般的な概念として捉えることであり、大局的な見方ともいえる。しかし、大局的といっても、ここでは「捨象」によって切り替え・選択した「見えない要素」との優劣をつけて捉えているわけではない。あくまでも、転換の促し方のメカニズムとしての「抽象」による「大局的」ということである。

#### 4. かつての高齢者自殺の心理社会的背景

ところで、筆者はかつて高齢者自殺の多発地域で調査をした。その結果においても、その自殺多発の要因として「個人的な愛情よりも家の存続」を重視するという日本人に特有の心理社会的背景が見られた<sup>[3]</sup>。

現在もおそらくそうであろうと予想されるが、当時の私の調査では、自殺する高齢者に1人暮らしの方や老人ホーム居住者はおられなかった。家族のおられる高齢者、それも三世代以上が同居している高齢者が多かった。新潟県での報告にも、「独居の高齢者はおらず、三世代家族が多い」「病気などによって身体機能を失い、仕事から引退し、家族の一員としての機能を失っている」という記述が見られた<sup>[4]</sup>。つまり、孫が同居している例が多いのである。高齢者は病弱となって家族に迷惑をかけたくない。家の存続に悪影響を与えたくないと考えていた。やはり、物語の受容過程に影響する日本人に特有の心理社会的背景の影響が見られる。

しかし、重要なのは、この場合も「見える要素」による「見えない要素」への転換の促し方のメカニズムが見られたことである。一例ではあるが、当時のコナセバサマと呼ばれていた産婆さん（助産師の資格の有無は不明）が使っていた道具にチカラヅナというのがあった。

その道具には、スゴロという臍の緒を切る道具や祈  
禱札等とならんで、チカラヅナという道具があった。  
資料によると「(座産の) 妊婦がキバルのを助けるため  
に古銭を握らせるとか、あるいは上から垂れ下げたヒ  
モにつながるように指示したのである。そのヒモには  
クビククリ（首吊り）に使った綱がよいとされ、それ  
を何人かで分けて用いたという。具体的には、クビク  
クリの綱に布切れを巻きかけて整えたものが使われた  
のである」と記述されている<sup>[5]</sup>。

つまり、「家の存続」のために自殺をするという象徴  
的な出来事を示しているのがこのチカラヅナなのであ  
る。そして、それが「お家」の次の世代の出産にお守  
りのようにして使われたのである。当時の高齢者は皆  
この道具の存在を知っていたはずである。このような  
「見える要素」は、「個人的な愛情」を捨象してしまう  
効果と、一方で、「家の存続」へと抽象化する、あるい  
は大局化するという効果を持つものの一つであったと  
推察される。このようにして物語生成、つまり物語と  
して受容されたのであろう。

## 5. おわりに

広くコミュニケーションにおいて「物語生成におけ  
る『見える要素』から『見えない要素』への転換を促  
すメカニズム」が重要と考えられる。筆者は、自閉症  
スペクトラム障害の認知行動傾向のある方のコミュニ  
ケーションの特徴を理解する鍵となると考えている<sup>[6]</sup>  
<sup>[7]</sup> <sup>[8]</sup> <sup>[9]</sup>。

それは、芸能、芸術、人文学的な文脈においても同  
様と考える。その促しとは、物語生成における多  
重性による、心理社会的背景の影響のもとに「見え  
る要素」を捨象したり抽象化したりする、「見えない要  
素」への転換のメカニズムである。このメカニズムが  
「見えない要素」どうしの切り替え、あるいはどの「見  
えない要素」を選ぶのかの選択を行っている。

## 文献

- [1] 小方孝 (2018) “物語の分解から合成へ”,小方他著 情報  
物語論-人工知能・認知・社会過程と物語生成-,pp48-49  
白桃書房
- [2] 小方孝 (2018) “物語と人間/社会/機械”,小方他著 情報物  
語論-人工知能・認知・社会過程と物語生成-,pp26-27  
白桃書房
- [3] 青木慎一郎 (2008) “高齢者自殺の社会的側面—心理社会  
的介入はなぜ有効なのか”,老年精神医学雑誌 Vol. 19 ,  
No.2,pp169-175

- [4] 高橋邦明 (2004) “地域における高齢者への自殺予防活動”,  
こころの科学 Vol. 118,pp29-33
- [5] 天野武 (1991) “スゴロをめぐる1, 2の問題”,浄法寺町  
歴史民族資料館調査研究報告 第1集 p29 浄法寺町  
歴史民族資料館
- [6] 青木慎一郎 (2017a) “学習困難とストーリー生成”,『日本  
認知科学会第34回大会発表論文集』. OS18-81.
- [7] 青木慎一郎 (2017b) “論文指導とワーキングメモリー  
—ASD 及びその傾向のある学生の支援から—”,『第55  
回全国大学保健管理研究集会 東北地方研究集会報告  
書』. pp.15-17.
- [8] 青木慎一郎 (2017c) “学習困難とストーリー生成—精神  
医学の視点から—”,『第56回ことば工学研究会資料』.  
pp.53-57.
- [9] 青木慎一郎他 (2018) “ASD傾向の学生支援における教  
員との連携—心理社会的動機と「般化」の観点から—”,  
第56回全国大学保健管理研究集会 東京大会報告書